[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 蔭山 正子

本論文は、セルフヘルプ・グループと専門職のパートナーシップを促進させるためのパートナーシップモデル（Stewart ら、1994）に基づいたプログラムを、精神障害者の家族会（以下、家族会とする）と専門職に当てはめて、プログラムの有効性を検証したものである。すなわち、専門職が家族会の例会に毎月参加し、家族会と専門職の役割と目的を明確にするための話し合いを行い、専門職が家族会に関わるために必要な教育を受けた。本研究は、家族会を単位としたグループ無作為化試験であり、6 ヶ月の介入期間前後の評価により、家族会（実験群 n=12；対照群 n=12）、家族会会員（実験群 n=76；対照群 n=73）、および専門職（実験群 n=15；対照群 n=14）に対するプログラムの効果を分析し、以下の結果を得ている。

１．家族会の組織に対する効果

会員数の増加に有意な介入効果が認められた。

２．家族会の会員個人に対する効果

会員の専門的サービス満足度（Client Satisfaction Questionnaire: CSQ-8）に有意な介入効果が認められた。特に、介入前の満足度が低い会員への有意な介入効果があった。また、有意水準 $p<0.1$ では、会員のサービス利用に関するエンパワメント（Service System of Family Empowerment Scale）を促す傾向が認められた。

会員自身によるグループ活動の評価（Group Appraisal Scale）、家族のエンパワメントの下位尺度（Family and Community/Political of Family Empowerment Scale）および自尊感情（Self-Esteem Scale）への有意な介入効果は、認められなかった。

３．専門職に対する効果

介入前に家族会への支援に関する知識と技術を十分持ち合わせていなかった専門職に対して、エンパワメント（Knowledge and Skills Subscale of Social Worker Empowerment Scale）を促す有意な介入効果が認められた。

以上、本論文は、地域で活動しているセルフヘルプ・グループを対象とした無作為化比較試験がこれまで殆ど実施されていないにも拘わらず、倫理的に十分な配慮をした上で、グループ無作為化試験を行い、プログラムの有効性を明らかにした点に独創性が認められる。また、我が国において前例の少ないグループ無作為化試験を行ったことは、今後の研究を進める上での方法論的価値が高い。保健領域において重要な社会資源であるセルフヘルプ・グループへの専門職の効果的な関わり方を、実際に活動しているグループと現場で働く専門職を対象にして検討した点において、臨床的応用性が高く、学位の授与に値するものと認められる。